論文の内容の要旨

論文題目　明治文学のエマソン受容―透谷、独歩、泡鳴―

氏名　水野達朗

エマソンの著作が、明治期の文学者に広く受け入れられていたことは、よく知られている。従来の受容史研究では、例えば北村透谷に関しては、「宇宙の大調和」を説くエマソンに対する、「自然からの乖離・孤立の意識」に苛まれた透谷、「楽天主義」のエマソンに対し、「厭世」の透谷という形で、両者の落差が指摘されている。国木田独歩の場合は、エマソン受容が、「自己の人格的独立」との関連で、捉えられている。岩野泡鳴に関しても、エマソンの「唯心論」と訣別し「自然即心霊」説を唱えたこと、エマソンの「楽天主義」を批判し、「悲愁」の意義を説いたことが強調されている。これらはみな、唯心論、楽天主義、人格の独立等、思想的・人生観的な視点で、エマソン受容を捉えるものといえる。これに対し本稿では、明治文学のエマソン受容を考える際、伝記と思想の受容ではなく、文体と表現の受容に焦点を合わせ、受容の現場を、より具体的かつ詳細に記述することを目指す。

エマソンのテクストでは、即物的な記述と理念的な記述とが交錯しているために、前後の接続が唐突になり、論理の整合性に欠けることにもなる。文学史の観点では、「矛盾した反対の意味の間の緊張」という「近代象徴主義の最も面白い特質」を、エマソンに認める意見がある。また哲学史的には、「相対性と非連続性の問題に取り組んだ」点で、「二十世紀に向け大胆に踏み出した」とされる。だがエマソンが、飛躍を交えながらも、強固な世

界観を主張していることも確かであり、この点、「矛盾を最大限に活用」せず、「超越的な統合の内に慌てて退却」したとか、「『一』に対する確信をも維持」し、「片足は過去に置いたままにした」とか、指摘される通りである。従来の受容史研究が注目した、唯心論、楽天主義、人格の独立等は、「統合」と「確信」の果てに生れた思想・人生観であるが、ではそこに至る過程としての錯綜した文体は、明治期の文学者にどう受容されていたのだろう。

本稿では、エマソンに対する関心を支えた、時代に固有の問題意識も重視する。現代の比較文学では、影響や系譜よりも寧ろ、何を「文学」と見るかという前提、即ちある表現が「文学」と認知されるために守らねばならない約束事や規範の総体が、文化や時代ごとにどう異なるかという問題が、重視されている。外国文学の受容研究を、この問題領域に接続することで、「近代的」な文学規範の形成期に、エマソンが有した多面的な意義が明らかにできる。端的に言えばエマソンは、「自己」や「世界」をありのままに描くことを求める規範意識に対し、描かれた対象にはいかにして意味が生じるのか、という問いを投げかけている。エマソン受容の諸相を検討することで、自己表現や現実描写に内在する問題が浮き彫りにできる。非連続的な諸要素が、連続的に統合されるテクストの特徴は、エマソンにおける「自己」と「世界」の問題に対し、いかなる視座を開いてくれるだろう。

まず表現主体に関しては、「詩人は部分的な人間の中で完全な人間を代表し、自分の富ではなく万人共通の冨を私達に伝える」と「詩人」(『第二論文集』)に言う、「詩人」の問題がある。詩人と普通の人は、区別されてはいるが、詩人が特別なのは、普通の人と異なるからでなく、逆に「万人共通」の人間性を体現しているからである。そこでエマソンの「詩人」では、卓越した存在としての面と、万人の代弁者としての面との関係が、焦点となる。

『自然』(一八三六年)では、最初は人全般に関し、自然からの隔絶が語られる。次に特別な「詩人」に関し、自然との精神的な交感が説かれ、この交感が最後に、人全般に拡張される。結果、精神的な普遍性の領域が形成されるのである。個別の詩人に担われた精神性に、万人共通の普遍性が付与される、非連続を孕んだ連続のメカニズムが、原文の急所といえるだろう。こうして、詩人の孤立という「ロマン派神話」に対し、詩人の能力を「誰でも手の届くもの」とした、「アメリカ的な変種」が提示される。だが『エマルソン』で『自然』を紹介した北村透谷は、詩人の個別性に拘泥し、普遍に至る道を見落としている。原文に隠された非連続に直面したのである。このあと、『第一論文集』(一八四一年)の「大霊」では、『自然』で獲得された、万人共通の精神性を前提に、今度は、平凡な個人の側からこの普遍性に飛躍するプロセスが追求される。「部分的な人間」としての凡人が、「万人

共通の富」に目覚める過程が、眼目とされるのである。エマソンは「大霊」で、平凡な日常のある瞬間、個人の裡に「共通の心」が流れ込むと説いた。特別な「瞬間」を設定することで、個別と普遍とを連続させたのである。ここで国木田独歩は、俗人としての個別的な生を離れられず、普遍的な精神性との断絶を実感する。彼もまた、個人的な生活に普遍的な精神性が付与される、飛躍を孕んだ連続のメカニズムに直面し、躓いたと言える。

なお『代表的人物』（一八五〇年）では、個別と普遍が「代表」の概念により「調停」される。植物では諸器官の形態を「葉」が代表し、動物では「背骨」が代表する。個別の事物の類似から、それらを集約する原型が抽出されるのだが、これは人間にも適用され、典型的な人物が集団を代表する。岩野泡鳴はここで、個別の類似には注目したが、普遍的な原型性、典型性に飛躍するのを控えた。やはり、個別と普遍の非連続に直面したのである。

次に世界認識に関し、エマソンは『自然』で、「理性という高次の働きが介入してくる迄は、動物の目がみごとな正確さで、明確な輪郭と鮮やかな表面とを見ている」が、「『理性』が刺激され、更に強力な視力を得ると、輪郭と表面は透明になりもう見えなくなる」と説いている。また「詩人」（『第二論文集』）でも、「自然の事物はどれも精神的な力に対応しているので、いまだ知力の及ばない謎めいた現象があればそれは、観察者の内部でこれに対応する機能が、まだ活性化していないためである」と言う。「視力」を高めれば、誰にも世界の真相が見える、見えないのは修練が足りないからである。そこで、世界の「輪郭と表面」が見える状態と、世界が精神的な相貌を現わす状態との関係が、焦点となるだろう。

エマソンのトランセンデンタリズムは、ユニテリアン派から派生した。人間の原罪を説く正統派に対し、ユニテリアン派は、人間の能力を信じ、修養による向上を説く。無条件の帰依を説く正統派に対し、ユニテリアン派は、自然の認識を通して、造物主の存在を証そうとする。合理的な認識を、聖書の啓示と適合させたのである。ここで、修養と自然は結び付いていない。そこでエマソンは『自然』で、唯心論を媒介に両者を結び付ける。聖書ではなく、自然自体に根源的な意義を見出し、自然がどう見えるかを、修養の度合いを測る尺度に据えたのである。透谷が自然の認識を軽視し、霊的な直感にのみ唯心論の本領を求めたのは、自然と唯心論の結び付きに躓いたものと言える。またエマソンの場合、「『理性』の直観と、経験される事実とをいかに調和させるか」が焦点となる。「詩人」でも、経験的な認識から、「神聖」なる直観に飛躍する道を説くが、独歩はここで透谷とは逆に、事実の認識に固執し、そこから精神的な領域に移る道を見出し損ねている。即ち独歩も、透谷とは別の形で、自然と精神との非連続に直面し、躓いたものといえるだろう。

エマソンは「唯名論者と実在論者」(『第二論文集』) で、「宇宙の何処でも、この昔ながらの両極性、造物主と被造物、精神と物質、正と邪の対立があるばかりで、ここではどんな命題に関しても肯定、否定の両方が可能である」と言う。安定した到達点のない、相対主義的な感覚が窺える。泡鳴は『自然』からも、「修養」のプロセスには到達点がないことを読み取る。自然と精神の非連続を見据え、両者が交錯する境界に滞留し続けたのである。

米国では、エマソンがポストモダンの文脈で再評価されている。「非連続」の問題も、ポストモダンの文脈で再発見された、複線的で多様なエマソン像に繋がる。この動きは従来エマソンを、精神性や人間性の唱道者としてのみ捉えてきたという反省から、テクストに胎まれる非連続にも眼を向けようとしたものといえる。逆に言うと米国では、意識的に不自然な面を強調する必要があるほど、精神性や人間性に対する関心が、テクストの読解を呪縛していたことにもなる。だが明治の文学者は、まずテクストの非連続性に直面し、苦労した。受容の現場でテクストは、自明化された精神的、人間的な意味を失い、不可解な謎の塊として立ち現われる。本国の文脈では死角に隠れる要素が、浮き彫りにされるのである。即ち私達は、非連続性に躓いた透谷や独歩、泡鳴の軌跡を通して、逆に、不自然なものが自明に連続していく、原文の不思議さを改めて認識せざるを得なくなるだろう。

エマソンは、「新しい資本制的な秩序における、精神的・感情的なジレンマを言い表わす言葉」を提供した人物として位置付けられる。透谷、独歩、泡鳴という明治の文学者も、「新しい資本制的な秩序」の下で、確かな規範が見失われ、不確実な自己や世界の中に、精神的な意味を模索せざるを得ない「ジレンマ」に直面したと思われる。彼等の読解が、原文の非連続を浮き彫りにするのも、そのためといえる。とはいえ原文では、非連続は乗り越えられ、精神的な普遍性が確保される。エマソンは、「アメリカの知的、文化的な生活の核心に横たわる逆説に、明確な表現を与えた」存在でもある。非連続な要素を強引に統合しながら、普遍性に辿り着こうとする衝迫の強さは、明治の文学者が躓いた「アメリカ」的なものといえるだろう。同じ「資本制的な秩序」の下、外国としての「アメリカ」と向き合う私達も、右の連続と非連続の狭間で、新しくエマソンを発見することになるだろう。